

開高 健の思い出

1 はじめに

開高 健(健は「けん」とも言われる)は、昭和を代表する小説家の一人で、釣りや食に関するエッセイも多数執筆している。茅ヶ崎には、1974 年(昭和 49 年)に東海岸南に書斎を構え、1989 年(昭和 64 年)に 58 歳で病気で亡くなるまでの 15 年間居住した(公益財団法人開高健記念会、2010)。

派遣先のベトナムで開高 健と出会い、その後も茅ヶ崎で交流のあった茅ヶ崎市在住の菅野 徹氏から、下記日程で開高 健との思い出についてお話を伺うことができた。

- ・インタビュー日時：平成 31 年 2 月 9 日(土)13 時 40 分～16 時
- ・語り手：菅野 徹氏
- ・聞き手：加藤幹雄・岸しげみ・岸 一弘

これまであまり知られていなかった情報もあるので、IC レコーダー(Panasonic RR-XS650)で録音した音声記録を文章化し、記録に留めることとした。

2 インタビューの内容

凡例

◇：聞き手

◆：菅野氏の話

※文章化に当たっては話しいただいた内容をできるだけ尊重したが、菅野氏に確認の上一部表現を変更し、文章の入れ替えも行っている。なお、説明が重複する部分については、一か所にまとめた。

.....

◇今日は菅野 徹さんに、開高 健とのいろいろな邂逅についてお話をお伺いしたいと思います。

まずは、菅野さんの略歴と茅ヶ崎に来られたいきさつについてお話を伺えればと思います。

◆私は 1938 年福島県福島市に生まれ、中学校まで福島におりました。高校に上がる時に東京に出てきて、都立高校に行きましたが、父が浦和で学校の先生をしていた関係で 2 年の時に県立浦和高校に転校し、そこを卒業しました。大学は、国際基督教大学

加藤幹雄*・岸しげみ・岸 一弘

でした。まだできたばかりの大学で、私は 5 回生です。卒業と同時に、日本経済新聞社(以下、日経)に入り、社会部の記者になりました。社会部というと普通は事件記者ですが、私の場合は文部省、科学技術庁、学術会議を担当しました。気象庁も担当しました。台風や豪雨の時は大変でした。その後、記者の原稿を直し、見出しを付け、紙面を作る整理部に異動しました。それから、外報部に行きました。新聞社によっては外信部、国際部といったりもしますが。そこで 3 年ぐらいベトナム戦争、中東やインド、パキスタンなどのアジアの戦争関係を主に担当しました。1973 年の 1 月から 1975 年の 4 月 3 日まで、特派員としてサイゴンに行きました。帰ってきってから、整理部のデスクの仕事を行いました。その後、企画調査部で会社の経営に関わる仕事をやりました。1987 年に、ニューヨークへ行きました。日経アメリカ社という現地法人の副社長でした。NY(ニューヨーク)と LA(ロサンゼルス)で、日経新聞を発行する仕事をやりました。

◇アメリカで発行された日経新聞は、日本語ですか。

◆日本語のものと、英語のものを出しました。当時、「Japan Economic Journal」という英語の週刊誌がありまして、それも一緒に発行しました。それを 3 年半やったあと、ロンドンに行きました。ここでは、日経ヨーロッパ社の社長でした。1990 年です。3 年いました。

◇ロンドンの日経も別法人ですか。

◆そうです。社員が全部で 60 人ほどですが、半分ぐらいは現地採用です。日本語を喋れない人もいました。半数は、東京本社から出向という形でした。記事を書き、広告も取り、販売もやりました。定年の 1 年前、1993 年に日本に戻って国際担当の専務補佐役を務めました。定年後は、子会社の日経映像という、映画を作ったり、テレビ番組を作ったり、ビデオを作ったりする会社ですが、常務を 4 年間務めました。そのあと、日経 PR の社長を 5 年、会長、相談役を務め、67 歳で仕事を終えました。茅ヶ崎には、

1964 年 11 月に浜見平団地ができた時に引っ越してきました。その前までは、小金井にいました。

◇結婚されたのは、いつですか。

◆結婚は入社とほぼ同時で、学生結婚みたいなものです。浜見平団地で最初は 2DK でしたが、子どもが 3 人(男ばかり)になり、3DK のところに移りました。そこから、サイゴンに行きました。

開高さんとは、サイゴンで出会いました。開高さんは 3 回ベトナムに行っているのですが、最初は 1965 年、次が 1968 年、3 回目が 1973 年でした。朝日新聞、文芸春秋などの臨時特派員としてです。3 回目は 1 月の初めですが、この時歴史的な停戦が成立し、米軍が段階的に撤退していくのですが、その状況を開高さんは見たかったんですね。彼は、5 月ぐらいまで足掛け 5 か月いました。私は、中心街の小さなホテル、その 3 階に部屋を 3 つ(寝室、オフィス、客室)借りていました。開高さんは、寝室の真下になる 2 階の 1 間に住んでいました。

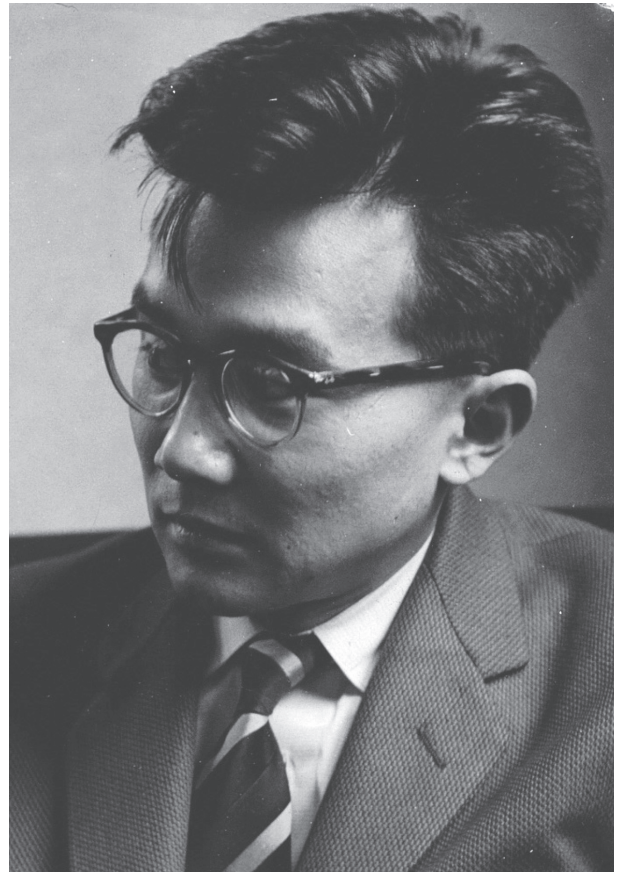
◇1 室いくらぐらいで借りていたのですか。

◆私の場合は、3 室で一か月 200 ドルぐらいだったかなと思います。通貨はピアストルといって、当時の値打ちが円の半分ぐらいで、1,000 円が 2,000 ピアストルでした。僕は酒が大好きで、ジョニ赤とジョニ黒は当時日本では 8,000 円とか 15,000 円とかしていましたが、ベトナムでは 2,000 ピアストルとか 3,000 ピアストルだったので、いくらでも飲めました。

開高さんは 1930 年生まれですから、一番最初にベトナムへ行った 1965 年は 34~35 歳の時でした。特派員で出るのは、30 代前半から遅くても 40 代です。僕の場合は、33 歳で行って、35 歳で帰りました。

◇一番元気な時ですね。

◆そう。開高さんと私の関係は、作家と新聞記者というより、友だちですね。開高さんが最初にベトナムへ行った時には、新聞記者とあまりしっくりいってなかったと思います。新聞記者の方も、胡散臭がっていました。「週刊朝日などにルポを書いて、有名になった気持ちで来ている」とちょっとばかにするような感じでした。開高さんは開高さんで、「新聞記者なんてなんだ」という気持ちがものすごくあつ



若き日の開高 健1(1959 年撮影)

たと思います。

ところが、2 回目の時には酒を一緒に飲むとか、マージャンをすとか、花札をやるとか、新聞記者と仲が良くなっていますね。そういったことが作品の中にも出てきます。開高さんは、実は新聞記者をじっと観察していたんです。開高さんの本の中に、新聞記者を茶化するような記述がいっぱい出てきます。「なんで新聞記者って言うかという、英語もろくにできなくて、地元の新聞を助手に翻訳させて、それを組み合わせて記事にして送るから、新聞記者なんだ。」と…。「ただごちゃごちゃ騒いでいるからマスコミなんだ。ますます混むということだ。」と、自分の言葉だったり、遊び友だちの女の子に言わせたりして、新聞記者のことをけなしています。

3 回目の時は、43 か 44 歳でしたが、新聞記者のことはみんな分かっている、どちらかというと馬鹿にして相手にしておらず、一緒に遊んだりはしませんでした。私は同じホテルに住んでいた、開高さんが取材を兼ねて郊外に行く時、一緒に行きました。3、4 回あります。開高さんは、週刊朝日に連

載を書いていた。カメラマンと一緒に取材に行っていたが、ある時カメラマンがいなくなってしまったんです。開高さんは、「どうしようか。困っちゃった。」と言うので、私はカメラを持って同行しました。アメリカの最後の兵隊が帰る時の写真は、私が撮ったもので、3～4枚、週刊朝日に載っています。週刊朝日に日経の記者の名前があるとまずいので、私の名前は伏せてありますが。

開高さんと支局で飲んだり、地元の歌手を呼んで一緒に歌を歌ったりしたときの写真も撮っています。
◇菅野さんのご家族は一緒だったんですか。

◆はい。

◇最初からですか。

◆サイゴン着任半年後です。最初は一人で行きました。会社から、「大丈夫だったら家族を呼んでもいい。」ということで、サイゴンに家族を連れて行ったのは、私が最初でした。幼稚園から小学校の男の子3人でしたが、いい勉強になると思いました。

◇3つの部屋で、ご家族一緒だったんですか。

◆違います。それは、一人の時です。街の真ん中の危険なところですから、さすがに家族は呼べません。郊外の車で10分ぐらいのところにアパートを借りました。3階建てで、1階は中国人の家主がいました。2階、3階が人に貸すようにできていました。2階は部屋が5つあって、非常に大きかったです。3階は、エアベトナムのパイロットが数人で借りていました。ほとんどアメリカ人で、CIA(中央情報局)もいたかもしれません。女の子を連れ込むので、教育上よろしくなかったですね。引っ越して家族が来る前に、仲間を呼んでお披露目をしました。開高さんも呼びました。その時の写真があります。

◇子供さんと開高さんは、出会っていますか。

◆子供が来た時は8月で、開高さんはもういませんでした。

◇開高さんと遊ぶときは二人だけだったのですか。

◆そうです。家族が来てからは、真面目なものでした。

時々女の子が開高さんの部屋に出入りしていました。夜中に、「酒ないか」と電話がかかってきました。酒瓶を持って行くと、部屋のベッドに女の子が

いたりしました。開高さんは、「こんなことを人に話していいのかな」ということでも何でも話すんですね。

私の妻は、8歳年上です。開高さんの奥さんの牧羊子さんも、8歳年上です。開高さんに、「あなたの話ばかり聞いて、自分のことを言わないで申し訳ない。」と話したところ、開高さんの目が輝きました。私は昭和13年生まれですが、家内を昭和11年生まれということにしていました。会社では、「書類を出せ」という事は言われませんでした。家内は見た目が若いので、会社の誰も疑いませんでした。家族をサイゴンに呼ぶときに、人事部長がパスポートを見て、「菅野君、君みたいに真面目な人が、こういう嘘をついていたのか。」と言われました。

開高さんは日本に帰って、茅ヶ崎の東海岸に家を建てました。近くに、サントリーの宣伝部長をやっていた山崎さんが住んでいて、世話をしてくれたんです。画家の青山義雄の隣です。開高さんは、「パシフィックホテルの近くに仕事場を作りたい」と言っていたので、ベトナムにいる時からその構想があったのだと思います。

当時僕は浜見平団地に住んでいましたが、子供が3人いて狭いので、1975年に帰国すると松ヶ丘へ引っ越しました。開高さんから、「菅野君の家へ行くよ」と連絡がありました。開高さんは、俺の女房を見に来たんです。8歳年上なので、開高さんと同じ年です。菅野君は奥さんとうまくやっているのかなと、いろいろ興味があつたようです。ワイン1本持って来て、女房が作った料理を「うまい、うまい」といって食べていました。開高さんはよくグルメと言われますが、これは間違いです。うまくてもまずくても、どこのものでもいっぱい食べるんです。あの人の刺身の食べ方は、醤油の海にベタベタと付けて食べるんです。わさびをちょっと乗せてという感じではありません。大量に食べるので、腹をこわすのは当たり前です。たちまち太るしね。酒は、何でも飲みました。

◆奥さんは奈良女子大で物理か化学を勉強した科学者で、寿屋(サントリーの前身)で仕事をしていました。佐治敬三がまだ社長になる前です。開高さんは

大阪市立大学卒ですが、卒業してしばらくは数々のアルバイトをしていました。英語ができないのに、英語教師のアルバイトをしたりもしました。これは、本の中に書いてあります。できちゃった婚で、奥さんは「自分が辞めるから私の代わりに主人を入れてください」と佐治敬三に頼んだわけです。

◇開高さんは昭和29年、24歳でサントリーに入社したと書かれていますね。奥さんのことはどこかに悪妻と書いてありましたが、悪妻というわけではないんですね。

◆奥さんは、詩人だからね。悪妻という部分もありますが、これは後にいろいろな人が言っただけです。

◇開高さんは、いつから有名人になったんでしょうか。

◆やはり、芥川賞を取ってからでしょうね。

◇1958年、昭和33年ですね。「裸の王様」で、第38回芥川賞を受賞しています。

◆大江健三郎とは、ライバルだよ。どちらが早く芥川賞を取るかで騒がれて、1年の差で開高さんが勝ったんです。開高さんは外にはあまり言わなかったけれど、僕には「ノーベル賞を取るんだ。ライバルは大江だ」と言っていました。目算もあつたようです。国内的には芥川賞受賞で知られていましたが、国際的にはまだ知られていなかったんです。川端康成や三島由紀夫の翻訳本はいっぱい出ていましたが、開高さんの翻訳は少なかったからです。開高さんの作品の中心は、闇シリーズです。「輝ける闇」、「夏の闇」、「花終る闇」です。「花終る闇」は、途中で書けなくなり、未完で終わってしまったんです。中身も、半分以上前のシリーズののだぶりです。表現も汚くなっています。作家というのはそのようなことがあります。自分をわざと悪く見たりします。私が編集者だったら、ちょっと困るなあというほどです。開高さんは、その当時「漂えど沈まずの状態だ」と言っていました。沈まないんだけど、どっちにも行けないということです。3つ目を、ベトナムのその後のことまで入れてきちんと書けば、ノーベル賞を取れたんじゃないかと思います。一番感心するのは、1作目の「輝ける闇」です。「夏の闇」よりは一般的評価が低いんですが、ベトナム戦争後の将来につい

て驚くようなことを書いています。世界的にも大変ですよ。だいたい書かれているとおりになりました。

「玉砕ける」という本もありますが、小説が書けなくなってしまったんです。これは私の考えですが、開高さんは釣りと女に逃げちゃったんですね。子どもの頃から親しんでいる釣りなら書けるということで、「オーパ」だとか、多くの釣りの本を出したわけです。出版社は開高さんの本を出して、ベストセラーにして儲けたかったんですが、開高さんはますます小説を書けなくなってしまったんです。開高健記念会は、開高さんを記念するというよりは、世話になった出版社が、開高さんを吊っている場所ですね。罪滅ぼしをしているんです。開高記念会の総会には5、6回出ていますが、新聞記者は私の他一人ぐらいで、ほとんど来ていません。あとは、雑誌の編集者か釣り友だちです。

◇なんで行き詰ったんですか。

◆人間の能力というのは、限度があるんじゃないでしょうか。あれだけ若い時に、爆発するみたいになったら、終わるのも早いんじゃないかな。出版社の人に言わせると、奥さんは全然歓迎してくれなかったそうです。

◇それで、悪妻と言われたんですか。

◆悪妻と言われるだけのことは、ありますね。私が「これから行きますよ」と電話して、行ったにもかかわらず、パジャマ姿で出てきて、部屋の中がぐちゃぐちゃになっているとか。

開高さんは、「小さい説を書くから、自分は小説家なんだ。新聞記者は何も知らないくせに大きなことを書くから、大説家だ。」とよく言っていました。

1973年1月28日に停戦協定ができて、日本の新聞各社は一面に2段ぐらいのぶち抜きで「ベトナムに平和が来た」と報じましたが、開高さんは、「また始まった。新聞記者は得意の作り話を書いているじゃないか」と言っていました。新聞記事には、本記と雑感記事があります。「ベトナム市民は外に飛び出して、本当の平和が来たと歓声を上げた」と書いていますが、これは前もって書いておいた予定稿。要するに、作文です。その時に書いて送るのでは間に合わないの、予め原稿を用意して、いつでも出せ



若き日の開高 健2(1963年撮影)

るようにしているんです。必ずしも記者が現地に行
って見ているわけではないんですね。

◇奥さんの牧羊子さんは、どのような人だったの
ですか。

◆私の知る限りでは、寝巻のまま家にいるような人
でした。開高さんは逆に、一日に定期便のように何
回か外に出ないと気の済まない人でしたが、体を壊
して太ってしまい、膝を悪くして歩くのが難しくな
りました。腰痛にもなり、胆石ができました。手術
で取った大きな胆石を、お守りだと言ってポケット
の中に入れていました。私は、「歩くか、走るか、ゴ
ルフをしなさい」と言いましたが、「歩けないので、
ゴルフはだめだ」ということで、水泳を始めました。
家から1.5 kmぐらいですが、ラチエン通りを歩いて、
週に何回か林スイミング教室に通っていました。お
腹が減ると、途中の肉屋でコロッケやメンチカツを
買って、食べる。江戸久という蕎麦屋に、開高健が
座ったという席があって、今も札があります。「寿司
善」には、「開高巻き」があります。恵方巻を小さく

したものです。「繁や」というステーキ屋にも、何度
か行っていたと聞きました。地元では、歓迎されて
いましたね。開高さんは人懐っこいので、林スイミ
ングではおばちゃんにすごい人気がありました。

◇開高さんのお宅は、できた時からあの形ですか。

◆サントリーの社員の時代に大阪から家族と一緒に
東京へ出てきて、杉並に住んでいました。東京では
仕事ができないので、どこか離れたところで仕事を
やりたいということで、茅ヶ崎に仕事場の家を作っ
たんです。逃避の場でもありました。ところが、奥
さんも娘も付いてきてしまった。要するに、押しか
けて来たんです。海外に釣りに行ったのも逃げたか
ったからでしょうね。

私の高校の後輩で、サントリーの広報部長だった
人がいます。開高さんと一緒にサントリーの宣伝を
やりたかったからです。彼の話では、記念館にする
時に何が一番困ったかという、家の中をどのよう
に整理して、人が見られるようにするかということ
でした。娘さんが亡くなり、奥さんも亡くなって、
大阪に妹さんはいましたが…。開高記念館は、市か
らいくらかの補助が出ていますが、開高さんの印税
が結構あって記念館を無料で開館していました。し
かし「ゆかりの人物館」と一緒になって、有料にな
りました。無料でできるのに、残念ですね。スタッ
フは、ボランティアに近い形でしょうか。事務局長
の森敬子もりけいこさんは、もともと編集者です。

◇開高さんが亡くなった後の資料整理に、菅野さん
は関わっているんですか。

◆私は1987年から7年間、日本にいなかったんで
す。開高さんが亡くなったのは、その間です。葬式
にも出ていません。開高記念館になるということも、
知りませんでした。ロンドンから戻ったのが1993年
ですが、記念館になっていました。

私がサイゴンにいる時に、日経で現地採用したベ
トナム人のチャン・バン・トゥアン(Tran Van Tuan)と
いう人がいます。彼がスパイの容疑をかけられ、ボ
ートピープルで脱出し、マレーシア経由オーストラ
リアの日経シドニー支局を訪ねました。トゥアンに、
日経の文化面に脱出記を書かせました。その後、ト
ゥアンは絵描きになりました。

◇トゥアンさんは優秀な方なんですね。

◆そうです。英語、フランス語もペラペラで、詩人でもあります。オーストラリアから奨学金をもらい、アメリカのヒューストン大学で絵を学びました。普通の絵じゃなくて、心象画というか、戦争時のベトナムでの体験を描いています。2005年に、その展覧会を茅ヶ崎のハスキーズギャラリーでやりました。同じ時に、開高記念館では開高さんのベトナムでの生活を中心にしたイベントをやりました。新聞、週刊誌でかなり取り上げられました。

◇菅野さんはハスキーズのオーナーの加藤さんとは、親しいんですか。

◆加藤さんとは家が近く、時々犬の散歩で出会ったりしていました。

◇トゥアンさんは、今おいくつぐらいですか。

◆79歳です。私とほとんど変わりません。今はオーストラリアのブリスベーンにいます。私と後輩のもと特派員とで、2回日本に招きましたが、まだ来たがっています。後任のサイゴン特派員はベトナムについて出版し、トゥアンのことも書いています。僕が帰った一週間後に北側が攻めてきて、4月30日に国が統一され、共産主義の国になりました。

◇トゥアンさんは、開高さんを知っていますか。

◆知っています。当時、チン・コン・ソンという有名なシンガーソングライターがいました。反戦歌で、政府からはいらまれたんですね。日本では、翻訳したものを新谷のり子が歌っています。一度チン・コン・ソンをオフィスに、一度は自宅に呼んで、飲みながら一緒に歌いました。開高さんにも声をかけ、「ラ・マルセイユ」を歌ったりしました。そこでトゥアンは、開高さんと出会ったわけです。開高さんが仕事で翻訳が必要な時には、トゥアンを貸してあげました。

◆本のタイトルを見ると、開高さんの変化がわかるような気がします。「輝ける闇」は、いかにも輝いています。そのあとは、「夏の闇」、「花終る闇」、「玉碎ける」と、だんだんだめになってしまったんです。自分でもだめになっていったのは分かっていたと思います。

開高さんも、思い切って奥さんと分かれてしまえ

ば違う人生があったんですね。開高さんも割と気が小さくて、純粹なところがあります。一見大きなことを言うように見えますが、あれは虚勢です。

彼は週刊朝日に「日本人の遊び場」というノンフィクションの連載を書いていた。一区切りがついたときに、「時間を取ってちょっと休んだ方がいいんじゃないの」ということになったんですね。開高さんは、「わがままを許してくれ。一か月ぐらいサイゴンへ行きたい」ということを言ったわけです。遊びに行くことはできない時代で、特別特派員ということで、1回目のベトナム行が実現しました。奥さんが、羽田まで見送りに行きました。どこか、外国へ行くらしいということは知っていましたが、車の中で奥さんが「あなた、どこへ行くの。」と聞いて、そこで初めてサイゴンに行くということが分かって、「あんな危ないところにとんでもない。」と止めたのですが、もう遅かったわけです。

◆これはほとんど知られていないことですが、開高さんの初期の作品の中に「片隅の迷路」という裁判小説があります。四国で殺人事件があつて、殺人犯として奥さんが捕まり、裁判で有罪になったけれども、本人は「私はやっていない。冤罪だ」と無罪を主張しました。当時茅ヶ崎にいた共同通信の記者で、小和田次郎というペンネームを使っていた原寿雄としおさんがいました。2017年に亡くなりましたが、当時新聞労連の役員をしていました。この人が、開高さんにこの事件のことについて「殺された人の奥さんが有罪になりましたが、私は無罪だと思います。でも、世の中を動かすには小説にするしかありません。」という手紙を書いたんです。資料も添えて。開高さんは、「このような事件は知らなかった。日本には、私が知らないことで大事なことがいっぱいあるんだな。勉強して、小説を書きます。」と返事を書いています。この件は毎日新聞で連載して、それが本になりました。社会派の山本薩夫監督により、映画化もされました。後で、裁判で犯人とされた奥さんは無罪であることがわかりました。この本が役割を果たしたわけです。この話を知ったのは、開高さんが亡くなったあとです。私は原さんと4度会っていますが、開高さんと直接会ったわけではなく、開高記念館にも

行っていないということです。原さんは、小和田のあたりに住んでいましたが、もともと平塚の人です。岩波から、ジャーナリスト関係の本を3冊出しています。世の中には、新聞記者をちょっとやってジャーナリストを名乗る人がいますが、とんでもない。ジャーナリストは、そんなにいるもんじゃない。でも、原さんは真のジャーナリストだと思います。原さんのことを私に教えてくれたのは、共産党の市会議員だった佐々木良文さんです。徳洲会病院を茅ヶ崎に誘致した人です。佐々木さんが死ぬ前に、原寿雄さんのことを教えてくれました。そして、原寿雄さんの家に行ってこの話を聞きました。その経緯を日経の文化部の記者にも話して、「記事にしたら」と言っただんですが、記事にはなりません。僕は、開高さんの作品の中で「片隅の迷路」は一つのエポックだと思います。もっと注目されていい作品です。佐々木さんにしろ、原さんにしろ、それに茅ヶ崎の人が関わっていたんです。原さんと開高さんのやり取りの手紙を、私は預かって記念館に寄付しました。◇これは、素晴らしい話ですね。

評論家の中には、「片隅の迷路」を評価する人も多いいんです。これが、開高さんの自分の気持ちから始まったのではなくて、原さんが働きかけ、一年後に開高さんが本にしたんです。このことは、どこにも書いてありません。

◇作家は、普通人に頼まれても書かないですね。

◆珍しいことです。開高さんは真面目な人なんです。◆月刊の日経広告手帳というのがあって、いろいろな人が広告についての意見、注文を書くコラムがあります。開高さんにも書いてもらいました。開高さんはコピーの達人だったので、「君も広告屋になったのか。ケッケケッ。」と笑い、コラムを書いてくれました。1980年ぐらいだったかな。

◆開高記念館には、来場者に感想を書いてもらうノートがあります。書いている人は、圧倒的に開高さんファンです。ファンは、開高さんが恵まれた環境でいい仕事をしたと思っていますが、それは間違いです。開高さんがいい仕事をしたのは、東京の汚いアパートや出版社に缶詰めにされていたホテルです。血のにじむような苦しみがあって、初めていい作品

ができたんです。

◆開高さんが最後に書いた「一日」という短編があります。1968年8月、開高さんが2回目にサイゴンに入った時は新聞記者との関係も密接で、一緒にマージャンしたり、酒を飲んだりしていました。ある夜、危ないというので本社の命令でバンコクに避難していた日経の特派員が、戻ってきました。開高さんが、「一杯飲もう」と誘ったんですが、先輩は「疲れている」ということで、断ったんです。その夜、宿舎で大砲の弾の破片が当たって、亡くなりました。「一日」の中で、その経緯を書いています。「一日」には、いろいろなことが書かれていて、開高さんは自分の一生のことを書いているのかなあと思っています。開高さんも、自分の死期に近いということをわかっていたんですね。

◇「一日」を書いたのは、死ぬ直前ですか。

◆死ぬ1年半前のことです。

◆ニューヨークタイムズの、ニール・シーファンという優秀な記者がいます。特派員のあと小説を書いて、ピューリッツア賞を取りました。そのタイトルが、「A shinning lie」(輝ける嘘)です。その前に開高さんは「輝ける闇」を書いていますので、「輝ける」を借用したのかもしれないと思っています。開高さんは、「A shinning lie」の翻訳本の序文を書いています。

◆栄光の開高健ではなくて、開高さんの心の闇というか本当の苦しみを、きちんと整理して残してくれないかなという気持ちがあります。

◆開高さんはベトナムでも釣りをしました。一週間ぐらい部屋にいなかった時があるんですが、メコンデルタの方に釣りに行っていたようです。私はまかないの中国人に調理を頼み、親しい記者を集めて、釣れた魚で鍋を作りました。

最後は、釣りと宝石にのめり込み、ジンギスカンの墓探しをするんですね。好奇心のある探検家です。前半の輝ける時代と比べると、後半は闇です。自分で言ったのか、編集者が言ったのか、わかりませんが、開高健をばらばらにすると「カイト」、「カケン」です。

◇海外に魚釣りに行くきっかけは、なんでしょうか。

◆開高さんは子どもの頃から釣りが好きでしたが、

「夏の闇」は奥只見の銀山平の釣り小屋みたいなところに閉じ籠って書きました。海外へあちこち行って、地元の釣りの名人と交友がありました。スウェーデンの王族、ドイツ、アラスカとか…。釣りを通じて、世界を広げたとは言えます。開高さんがやるようになって、日本でルアー釣りが広まりました。

3 おわりに

インタビューの内容で最も特筆すべき事柄として、開高健氏の初期の著作「片隅の迷路」が、四国で起きた殺人事件の犯人とされた女性が無罪であることを書き記したものであり、当時茅ヶ崎に住んでいた共同通信の記者原寿雄氏からの依頼によるものだということが挙げられる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、貴重なお時間を割いていただいた菅野 徹氏、開高 健の写真をお貸しいただくとともに内容をチェックしていただいた公益財団法人開高健記念会事務局長の森 敬子氏に感謝申し上げます。

参考文献

公益財団法人開高健記念会、2010. 開高健の世界.
88pp. 公益財団法人開高健記念会、東京.

*ちがさき丸ごと博物館の会会員